しんらん同人

No.579
3・4月号

浄土真宗本願寺派　誓願寺
〒171-0052　東京都豊島区南長崎1-3-8
【電話】03-3950-7828　【ホームページ】http://www.seiganji-tokyo.jp/

【 最近の法座の様子 】

［2/11 定例法座］
ご講師の横内教順師

［2/25 定例法座・祥月命日合同法要］
前列右から3人目がご講師の八幡真衣師

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職　古賀尚之

人生訓や結婚式の祝辞として使われる言葉に「人生には三つの坂があります。それは上り坂・下り坂・そしてまさかというさかであり、日頃からこのまさかに備えることが大切です。」というものがあります。

最近やっと自分の死と言うものが、この第三の坂、まさかという範疇から抜け出たものとして考えられるようになった気がします。

しかしこのことは、私が八十代を目前にした今だから言えるのかもしれません。また、健康な体で活動することに少し疲れたからかもしれません。かといって、定期健診で急に余命を告げられた時に、素直に事態を受け止められるかは分かりません。

今を一生懸命に生きようと思っていてもなかなか続きませんが、心置きなくお浄土に生まれさせて頂くためにも、やり残したと思うことのないように日々過ごしたいものです。

2月2日に初代住職の祥月命日法要を行いました。初代住職は行年76歳でした。

「廻心（えしん）」

誓願寺初代住職　故　**岡本泰雄**

廻心とは、心をひるがえすことではありますが、ただ「思い返す」ことではありません。

「その廻心とは、日ごろ、本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧を賜りて『日ごろの心にては往生かなうべからず』と思ひて、本の心をひきかえて本願をたのみまいらすをこそ、廻心とは申し候へ」と述べられています。

つまり「日ごろの心」「本の心」をひきかえて、本願を信ずる身になるということが廻心なのです。

しかし、廻心は自分自身でするのではなくて、弥陀の智慧を賜りて廻心させられるのであるといわれています。

そこでまず「日ごろの心」とか「本の心」とかいう「心」は何をさしているのでしょうか。

それは、大雑把に言うなら、だれでも考えている常識的な考え方とでも言ったらよいでありましょうか。この「日ごろの心」は、自己中心の考えです。つまり、何でも自分の考え方を元にして考えることです。自分の目ですべてを見、自分の考え方ですべてを考えていくことです。

自分の目や自分の考え方が本当に正しいかどうかを、省みることなくして、もともと正しいものだと考えているのです。

ところが弥陀の智慧を賜ってみると、大変な見当違いであったことが判ってくるのです。

弥陀の智慧を賜るということは、真実の教えに遇い、真実の光に浴してみると「日ごろの心」「本の心」が間違いであった。ひっくり返った、さかさまの考えであったと知らされてくるのです。

例えば、教えに遇ってみると、自分の考えは絶対に間違いないと思っていたのに、間違いだらけであった、と知らされるのです。

自分の命はいつまでもあるように思っていたのに、いつ果てるか分からない、おぼつかない命であったと、つくづく思い知らされるのであります。

自分は善いことを行おうと思えば、思うように善が行え。悪を止めようとすれば、自由に悪が止められると思っていたのに、真実の善は一つも出来ず、利己主義の悪を積む事しか出来ない自分であったとしらされるのです。

要するに、我執の生活であって、そこから悩み苦しんでいるのに、悩みや苦しみは外からのみ来るように思っている。いつでも我が中心になって動いているために、迷いを続けている自分であることに気付かずにいたのです。

鏡がなくては自分の顔が見られない様に、真実の教えの鏡をめぐまれなくては、真実の自己も真実の人生も分からないので

す。

この真実の光にあった人達は、すべて自己の愚かさに泣いているのです。

善導大師は「罪悪生死の凡夫」といわれ、法然上人は「愚痴の法然房」といい、親鸞聖人は「愚禿親鸞」と称されています。

世間的に見ても、その道を深く突き進んだ人たちは、決して自分を誇るようなところはありません。

学問に生涯を捧げた人たちは、死ぬまで学問を続け、これで完成したとはいわれず。科学に専念する人たちは、無限の世界を仰いでおられるのです。

その道に達した人たちは、限りない世界を指向し、自己の足りなさを知っておられるのです。

小さな灯で自分の足元を見ているのではなくて、無限の光によって自分を見せられるのであるから、自己を過大評価していた誤った考えが打ち砕かれてゆくのです。

「日ごろの心」がやぶられることは、悲しいことであり、寂しいことです。しかし、この打ち砕かれた自分、悲しまずにはおれない自分を照らし出してくださる光を仰ぐことが出来るのです。

暖かく包んで下さる御光に微笑まずにはおれないのです。一度は砕かれたこの悲しみが、実は、そのまま無限の光に包まれていた自分であったことを知らしめられるのです。

自己を主張する力みもいらず、足りない智慧を悲しむこともなく、罪深く汚れはてた自己に泣くこともない、この身のままが広大な願いの目当てであったことを知らされます。

『抱かれてありとも知らず　愚かにも、われ反抗す　大いなるみ手に』と、力強い母の胸に抱かれた赤子のように、のびのびと、ゆったりした境地が開かれてくるのです。

この心を廻心といったのです。全くの大転換です。全く一大転換です。闇を闇とも知らず、あてどもなく、焦りつつ、さまよい歩く生活から転じて、明るく力強く、精一杯に生き抜く力を恵まれるのです。

この廻心せしめられた生活が、信心の生活であり、念仏の生活なのです。

合掌

ご法座等のご案内

どなたでもご自由にご参加いただけます。
参加費は無料です。

3月

3・10（日）
■午前十時～
定例法座
【内田正祥師（三重県）】
■正午～
医療相談
【佐藤公彦医師】

3・17（日）
■午前十時～
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生までとその保護者）

3・24（日）
■午後一時～
彼岸会・祥月命日合同法要
【村田朝雅師（京都府）】

4月

4・14（日）
■午前十時～
花まつり
【野村康治師（大阪府）】
■正午～
医療相談
【佐藤公彦医師】

4・21（日）
■午前十時～
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生までとその保護者）

4・28（日）
■午後一時～
定例法座・祥月命日合同法要
【米田順昭師（広島県）】

編集後記

・能登半島地震により被災されました多くの方々に衷心よりお見舞い申し上げますとともに、その後の復興活動もままならぬ状況に心が痛む日々です。今は自分に与えられた範囲で頑張りたいと考えています。

・ベトナムに住む孫たちも、進学の都合で今夏には母親と孫が帰国する予定とのこと。家族が離れ離れになることは寂しい事ですが・・難しい問題です。

〔2024年の年始に撮影した家族写真〕

〔飛行機にも乗り慣れました〕